時代の変革期を生きた益田元祥

平成３０年　９月１４日

於益田商工会議所

報告：益田市歴史文化研究センター　中司　健一

絹本著色　益田元祥像
（島根県立石見美術館所蔵。
重要文化財＜美術品＞）

「石見の戦国武将」展

- 平成２９年度秋に開催した「石見の戦国武将」展は、目標入場者数８，０００人に対し、１１，６６９人という１５０％近い成果をあげることができました。
- 市外、県外からも多くの方にご来場いただき、益田の豊かな歴史文化を全国に発信する機会となりました。

一方、こんな声も…

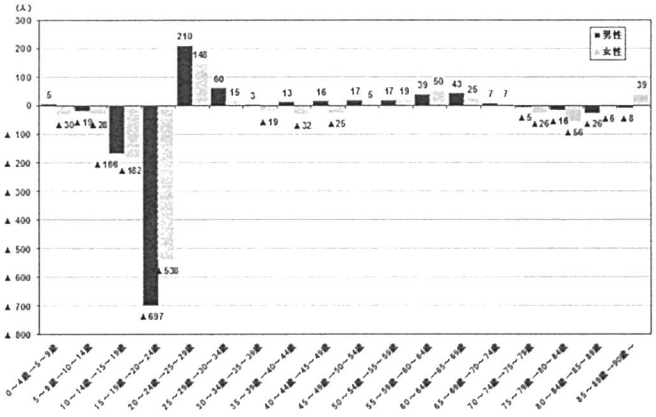
- 益田氏よりも全国的に有名な人麿や雪舟の研究や発信に取り組むべきではないか。
- 益田氏は、結局益田を見捨てて出て行った人たちだ。だから益田には関係がない。

中世益田を研究・発信する意義

- 益田氏はこの益田の地域に生きた、私たちの先人であり、その生き様からは現在の益田に生きる私たちにとってとても貴重な多くの情報を得ることができます。
- 益田に生きた先人をしっかり研究し、顕彰することが地域の誇りにつながるのではないでしょうか。
- また、それは他の市町村にはない、益田ならではの、地域の特長です。

「益田から出て行った」という評価

- まず、次の頁の図をご覧下さい。



2005年（平成17年）から2010年（平成22年）の年齢別人口移動

「益田から出て行った」という評価

- 現在の益田市では、２０歳前後で多くの人が益田から出て行き、その後、あまり戻ってきていないことがわかります。
- 就学先や就職先の決して多くない益田市では、どうしてもこの世代の多くの人々が一度は益田を離れることになってしまいます。
- 益田から出て行くことを非難することは生産的ではないでしょう。

「益田を見捨てた」という評価

- これは事実なのでしょうか。
- この点について、益田を去ったときの益田氏当主である益田元祥がどのような考えを持っていたのか、またその時代はどのような時代であったのかを考えることにより、検証してみたいと思います。

元祥が生きた時代

- 益田元祥が活躍した時代は安土桃山時代。
- 織田信長や豊臣秀吉が天下統一事業を進め、徳川家康が江戸幕府を開き、豊臣氏を滅ぼすことによって、それは完結しました。
- 研究の世界では、この時期を中世から近世への時代の大きな変革期として、中近世移行期と呼んでいます。

中世とは？

- およそ平安時代末から安土桃山時代まで。その間、鎌倉時代・南北朝時代・室町時代・戦国時代がある。

絹本著色伝源頼朝像（神護寺蔵）

後醍醐天皇像（清浄光寺蔵）

足利義満像（鹿苑寺蔵）

戦乱の時代

- 多くの戦乱に明け暮れた時代。主なものだけでも、源平合戦、南北朝の内乱、応仁の乱、そして戦国の争乱。

長篠合戦図屏風（徳川美術館蔵）

地域性豊かな時代

- なぜ戦乱の時代だったのか？
- ・各地に有力な領主が存在していました。
- ・これらの領主は主体的に活動しました。
- ・中央政権はこれらの領主を完全に支配できたわけではありませんでした。
- 見方を変えれば、地域が主体的な時代、地域性が豊かな時代であったと言えます。

近世への変革

- 中世から近世への大きな変化は、

・江戸幕府の将軍を国内の最高権力と位置づけること

・領主達の在地性を否定すること

によって、領主達の主体性を大きく制限することにありました。

在地性の否定

- 領主の主体性の基盤は地域との結びつきにありました。
- 豊臣秀吉はこれを否定するために、太閤検地と所領替えを実施します。
- 領地を石高（生産力）で把握され、先祖伝来の領地から離れることになり、石高により役を課されることで、中央政権―大名の統制を強く受けることになります。

豊臣秀吉像（高台院所蔵）

毛利氏領国の性格

- 毛利氏領国は、毛利氏がもともとは国衆（市町村規模を支配）であったため、多くの領主は毛利氏との同格意識があり、盟約によりその領国に属していると考えていました。
- 毛利氏は豊臣政権のもとで、このような領国の性格を改めるためにも、検地と所領替えを進める必要がありました。

毛利輝元像（毛利博物館所蔵）

領主たちの抵抗

- このような毛利氏の方針に従わない領主たちもいました。
- 検地に先立つ領地の申告に際して過少申告したとある領主は、検地後に申告した分の石高の領地しか認められず、大きく領地を減らされました。
- 毛利氏に対してあくまで対等であろうとした別の領主は、最終的に直系が途絶えてしまいました。

国替えの方針

- 慶長４（1599）年、毛利氏の重臣であり、豊臣政権との連絡役であった安国寺恵瓊は、吉見氏や毛利氏の国替えが必要であると主張していました（史料１）。

この年　毛利輝元、安国寺恵瓊は吉見・益田を国替えにすべきと主張していると、毛利元康に伝える。

さ三五　毛利輝元書状（厚狭毛利家文書）　『山口県史』（資料編古代・中世）　より

「（墨引）（毛利）元康まいる　（毛利輝元）右馬　申給へ

（吉見氏等）吉ミ・（益田氏）ますたことハ先国かへ可申付哉と、（安国寺恵瓊）此中安国なとも被申候、色々申候処、是も秋へのへ可然候する哉と今あたりにて分別被申候、然間吉ミ人数等召上せ、昔請之儀可被申付之通、早々可被仰渡候、為御心得申候、我々ハ用捨も候つれ共、（以天地書）「今の時」分大事存候間、其段ニもかまい候ハて重畳申つる事候、右分先可然候、さ候て秋しと〳〵としらへ尤と申事候〳〵、恐々かしく、

○この文書は年月日を欠くが、慶長四年のものと考えられるので、しばらくここに収める。

益田元祥の提案

- このような状況下、益田元祥は自ら所領替えの提案をします（史料２）。

絹本著色　益田元祥像
（島根県立石見美術館所蔵。
重要文化財<美術品>）

毛利輝元像（毛利博物館所蔵）

提案の内容

- 提案の内容は、所領替え先についての希望でした。
- 第一希望は石見国那賀郡（浜田市・江津市）
- 第二希望は長門国阿武郡（山口県北部）
- 第三希望は石見国吉賀郡（鹿足郡）か周防国山代地方（山口県岩国市北部）
- 第四希望は周防国都濃郡（山口県周南市）

元祥の思い

- 提案の背景にあった元祥の思いは、一人でも多くの家臣を連れて行きたいから、なるべく近くにしてほしいというものでした。
- 近いところであれば「悪所」でもかまわないとさえ言っています。
- また、毛利氏側の事情もよく理解し提案しています。

毛利輝元の好意

- このような益田元祥の提案に、毛利輝元はたいへん感心し、今は益田氏の所領替えをしないと決定しました（史料３）。
- 元祥もこれに感謝しています（史料４）。

この年　毛利輝元、榎本元吉に、益田氏を知行替えする気はないが、他への手前もあるとして、元祥には心配しないようにとだけ伝えさせる。

九三六　毛利輝元自筆書状案（毛利家文書）△大日古一一二七一

（端裏書）「（榎本元吉）為中へ案文」

（益田元祥）益玄内状具見候、惣別彼仁之儀ハ慥なる人にて候、以来共ニ身ニも可仕存候故、（毛利秀就）松寿母兄弟共修理（益田景祥）申合候、其段彼方にも被存当、内意引切テ懸意之由候、然者、今度所替之儀共、惣なミ付而、内々無等閑衆なと案外之被申事共にて候つ、さりなから、おもしろく仕延候而、彼仁ハ今之分可仕内意候、面むきハ、自前ひいき所替にハ仕ましく存居候、若申様候へは、たて之分別にて物のあちわるく成候へはと存候自然ニなにと聞、と存可差置と、奥意存候つる、此条ハ彼玄へも申ましく候、たゝ所替之儀ハ御座候ましく候間、其不及気遣とはかり申候て可置候、以来共無疎意身ニも可仕内意由をハ、候右之段をハ内々可物かたり候〳〵、為心得候、──

○この文書は年月日を欠くが、慶長四年のものと考えられるので、しばらくここに収める。

元祥の先見性

- 益田元祥は、時代の状況をよく理解し、所領替えが避けられないことを自覚していました。
- また、他の領主が毛利氏との対等意識を持ち続け、所領替えなどに対抗したのに対し、むしろ積極的に協力しました。
- さらに、なるべく多くの家臣を連れて行きたいという家臣思いの側面もありました。

おわりに

- 最終的に、関ヶ原の戦いで毛利氏が属した西軍が敗れ、毛利氏は中国地方の西半分から周防・長門の２ヶ国に削減され、元祥も益田を去らざるを得なくなります。
- しかし、それは決して好き好んで出て行ったわけではなく、時代の趨勢であり、しかたのないことでした。
- ただ、そのような中で、元祥は最善を尽くし、毛利氏から高く評価されました。